

# アパルトヘイト分析の「死角」

— セクシュアリティからの問い —

上 窪 一 世

## A Missing Link

— Sexual Aspects of Apartheid Analysis —

KAMIKUBO Kazuyo

### 〈はじめに〉

#### エピソード1

(3) The state may not unfairly discriminate directly or indirectly against anyone on one or more grounds, including race, gender, sex, pregnancy, marital status, ethnic or social origin, colour, *sexual orientation*, age, disability, religion, conscience, belief, culture, language, and birth. [斜体は、筆者による]

(我が国は次の単数、または複数の理由つまり、人種、ジェンダー、性、妊娠、婚姻状態、エスニックなまたは社会的な出自、肌の色、性的志向、年齢、障害、宗教、良心、信条、文化、言語、出自によって直接的、あるいは間接的にいかなる人も不公平に処遇しない。)

— 南アフリカ共和国憲法、第2章権利章典、平等条項より —

#### エピソード2

このような性的少数者への取り締まりは、抑圧的なアパルトヘイトのイデオロギーと一致するものであったが、活動家達が言うには同性愛 (homosexuality) を外部から持ち込まれた異質なもの (foreign) として意味づけようと広範に行われていた企みと一致すると共に、南ア政府による厳重な取り締まりは、影響力のあるアフリカーナーの文化、宗教団体内で表明されていた裕福なユダヤ人やイギリス人男性がアフリカーナーの少年達を貶めているという懸念によっても動機付けされていた<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> Sheila Croucher (2002), "South Africa's Democratisation and the Politics of Gay Liberation", *Journal of Southern African Studies*, vol 28. no.2 June, p.317.

### ：こぼれ落ちた視点

エピソード1は、1997年に施行された南アフリカ共和国（以下、南ア）憲法内の条文である<sup>2</sup>。この憲法が施行されたとき、「世界一リベラルな」と形容された。その際よく引き合いに出されたのが、上記の第2章「権利章典」の平等条項である。このように憲法に性的指向による差別を禁じる条項が明記されたのは、世界でも初めてのことであった<sup>3</sup>。「人権」が叫ばれる現代においては、憲法に性的指向による差別を禁じる項目が明示されることは斬新ではあっても奇異なものとは思われないだろう。それでも、条項に盛り込まれるまでには幾多の衝突と交渉の過程があった。80年代に入り、南ア国内の同性愛者団体<sup>4</sup>による活動もさることながら、同時期の海外の同性愛者団体や反アパルトヘイト運動体によるANC（「アフリカ民族会議」。現与党）への働きかけが後に憲法条項について同性愛者の権利を含むようにとの思考を促したとの指摘もある<sup>5</sup>。同性愛者の権利として性的指向を禁じる文言が憲法条項に盛り込まれる過程での同性愛者による働きかけと経緯については後述するが、この一連の憲法条項挿入をめぐる経緯と結果は南アにおいてセクシュアリティが留意された出来事であったことに注目したい。

また、エピソード2は南アにおける同性愛者がある時代においてどのように認知されていたのかを物語っている。そこには南ア独特のエスニックな関係とセクシュアリティが反映された形で問題が提示されていよう。こうした関係性は背徳法、交婚禁止法などセクシュアリティに関わるアパルトヘイト法によってさらに強化されていったのである。

このように南アの歴史の中にはアパルトヘイトという権力とセクシュアリティとの関係が見え隠れしているにも関わらず、これまで南アの歴史を語る上で、両者の関係を考察した研究は余り見られない。従来の考察の切り口としては、人種、階級、エスニックな関係、ジェンダー、といったものがあり、これらの分析概念の論争を経て、今日これらは相互に関係しあっており、複眼的な視点で南アの歴史、アパルトヘイトの考察を行うという姿勢が認知されてきた。

本稿はこうした複眼的な視点での分析、考察という流れを継承しつつ、従来の視点だけではとりこぼされてしまう事象を組み込んで考察するためにセクシュアリティという分析視角が必要ではないか、ということを提案したい。

考察の前になぜ、研究において、特に社会科学の分野においてセクシュアリティを扱うことがタブー、もしくはフェミニズム研究、ゲイスタディーズといった分野での成果が援用されにくいのかということを書いておきたい。この点についてはやや長くなるが、上野

<sup>2</sup> 1996年5月に採択され、97年2月に発効した。

<sup>3</sup> Croucher, op.cit., p.315.

<sup>4</sup> 実際にどのような団体が結成され、活動してきたのかについては以下を参照のこと；

Mark Gevisser (1995), "A Different Fight for Freedom: A history of South African lesbian and gay organization from the 1950s to the 1990s" in Gevisser, Mark and Cameron, Edwin (1995), *Defiant desire*, New York / London : Routledge, pp.14-86.

<sup>5</sup> Gevisser, ibid., p.56.

[1996: 10-13] の次の記述が参考になる。

「セクシュアリティ」という領域の成立は、それを通じて「私的な領域」というものが「公的」につくりだされるための装置だったのである。プライバシー privacy（私的な領域）という言葉には、「公的領域から分離された」「秘匿された」もの、という含意がある。「公的人間」の背後にある「内面」「心理」というものが捏造され、セクシュアリティについて語ることが「真理」について語ることと同義になる。すでに多くの論者によって指摘されていることだが、近代以前には性について語ることが「内面」や「人格」に結びつけて考えられることはなかった。「真理」は「公的領域」から隠されたことがらと同義になり、人々は秘匿された「自己の真実」を「告白」し始める。「われわれ」から「わたくし」というものが分離し、「われわれ」に還元しがたいものだけを、人々は「個性」や「人格」と見なすようになる。——略——

セクシュアリティが「私領域」を構成し、それが「公領域」「公的人間」を背後から支えている。「公領域」と「私領域」の分離とその相互依存性、共犯性については、つとにあばかれてきた。——略——

セクシュアリティ研究には、いくつかの困難がつきまとう。第一は、セクシュアリティ研究それ自体が、性の近代の装置のなかにまきこまれているために、タブー視され抑圧されがちなことである。第二はそれにともなって、セクシュアリティをめぐる言説そのものが公領域では抑制され、算出されにくいことである<sup>6</sup>。

南アにおいて厳然たる事実としてのセクシュアリティの抑圧があっても、南ア研究において、どこか秘められた「私的領域」という意識がセクシュアリティとアパルトヘイトの関係を考察する妨げになっていなかったらうか。両者の関係を考察していくことが、アパルトヘイトについてのどのような理解に繋がるのかという可能性を念頭に置きつつ本稿では論じたい。

以下では、本稿のキー概念となる「セクシュアリティ」について述べた後、1) 制度、法的側面としてのアパルトヘイトにおけるセクシュアリティの扱われ方、と 2) 生活状況としてのアパルトヘイトにおけるセクシュアリティの表出として同性愛者への社会的受容や認知を考察していく<sup>7</sup>。

## 〈セクシュアリティと権力〉

### ：「セクシュアリティ」とは

ここではまず本稿の鍵概念である「セクシュアリティ」についてみておく。上野 [1995: 2] ではセクシュアリティについて次のように述べている。

<sup>6</sup> 上野千鶴子 (1996) 「セクシュアリティの社会学・序説」、井上俊他編 (1996) 『岩波講座 現代社会学 10 セクシュアリティの社会学』、岩波書店、10-13ページ

<sup>7</sup> ここでアパルトヘイトを「制度」と「生活状況」に分けているのは、筆者がアパルトヘイトを社会的構築物として捉えることを意図しつつも、単にそれを主張するだけではアパルトヘイトの実態にそぐわないと考えるためである。後者の区別には人々にとってアパルトヘイトは単なる制度、法律を超えて、日々の生活のあらゆる側面にまで浸み込んだ「現実」として存在していたとの考えを込めている。

セクシュアリティとは、まだ日本語になじみのうすい言葉である。セックスとセクシュアリティの違いを、全米性教育協会（SIECUS）の定義を援用して、「セックスは両脚のあいだ（つまり性器）、セクシュアリティは両耳のあいだ（つまり大脳）にある」と言っても、まだ十分ではない。セクシュアリティはこれまで日本語では「性現象」もしくは「性的欲望」と訳されてきた。ここではセクシュアリティを「性をめぐる観念と欲望の集合」と定義しておこう。欲望もまた社会的に構築されるものであるならば、セクシュアリティとはすぐれて文化的なものである<sup>8</sup>。

本稿において特に有用と思われるのは末尾の「欲望もまた社会的に構築されるものであるならば、セクシュアリティとはすぐれて文化的なものである」という一文である。南アにおいてこの欲望の構築と操作にアパルトヘイトがどのように関わっていたのか。そして、そのことが逆にアパルトヘイトとそれによって規定される社会にどのような影響を与えていたのだろうか、という疑問をもたらししてくれる。

### ：権力との関係に関わる示唆的論考

では、この疑問をどのような道筋で考えていけばよいだろうか。ここでは主にナチズム時代のドイツにおけるナショナリズムと「市民的価値観（リスペクタビリティ）」<sup>9</sup>の関係につ

<sup>8</sup> 上野千鶴子（1995）『「セクシュアリティ」の近代を超えて』、井上輝子、上野千鶴子、江原由美子編『日本のフェミニズム 6 セクシュアリティ』岩波書店、2ページ。

また、セクシュアリティについての定義、先行研究の概観、研究の現状、課題といったことについては次の論考を参照。上野 千鶴子（1996）「セクシュアリティの社会学・序説」、斎藤 光（1996）「セクシュアリティ研究の現状と課題」。共に井上俊他編（1996）『岩波講座 現代社会学 10 セクシュアリティの社会学』、岩波書店、に収録。その論考のなかで斎藤は70年代以降日本へセクシュアリティという概念を提示してきたフランス語文化圏、イギリス文化圏でのこの概念の成り立ち、フォーコーによる定義付けなどを検討した上で、「セクシュアリティ」を日本の一般的な状況ではまだ曖昧な受けとめられ方であり、英仏では一定の意味を持ちうるものの、その歴史的成り立ちからして意味は変動していることをまず、指摘している。このように斎藤は歴史的構造を持つものという、構築主義的理解の上で論じているが、それが、構築主義対本質主義の対立論争を招く危うさも含んでいること、そしてその危うさは実は「近代的な学問」という場が生じさせてしまうものではないかという目配りもしている。さらに、「学的対象とされる時には、人間の内的・外的に示す性、あるいは性現象といったものであり、また、分析整理の用具としては『性』『セックス』と明晰に判明に区別される形態や機能を獲得してはいない」とこの用語を整理している。しかも、斎藤は、「セクシュアリティの社会学」という論じ方が成立するならば、成立要件に際しての留意点として、セクシュアリティについて分析を行うことが、それを行おうとする主体、使用する方法、道具自体がもともと分析対象に取り込まれているという構造を有している可能性があることに注意を促している。

<sup>9</sup> 日本語に翻訳されるにあたって、モッセの著書を翻訳した佐藤は「リスペクタビリティ」を「市民的価値観」と訳したことについて次のように述べている：「本書の中心的概念である「リスペクタビリティ」（尊敬されるに値すること）は本来はヴィクトリア時代のイギリス市民社会で使われた独特な価値判断の基準である。その意味では、市民として他人から尊敬されることを求める中産階級を中心とした理念と言え。つまり、自分を尊敬する他人の視線を意識する理念であり、精神的要素のみならず服装や消費生活など外面的要素も含む価値基準であり、中産階級はこれを労働者階級に対しても社会規範として受け入れさせようとしていた。具体的には勤勉、自助から清潔や健全な家庭イメージまで多様な文脈で理解された。こうした文化的ヘゲモニーの成立する状況を踏まえて、正確な日本語に置き換えることは困難であるが、本書では、独訳本（原則として、「市民道徳」と訳されている）を参考にしつつ、「市民的価値観」と表記した。ジョージ・L・モッセ（佐藤卓己、佐藤八寿子 訳）（1996）『ナショナリズム と セクシュアリティ：市民道徳とナチズム』柏書房、凡例（6ページ）。

いて考察したモッセの論考を参照しながら考えたい。

まず、モッセは「市民的価値観」の定義を含みながら次のようにこの関係を論じている；

<sup>リスペクタビリティ</sup>市民的価値観とは、セクシュアリティに対する適切な態度はもちろんのこと、「礼にかなった正しい」作法と道徳を刺す用語である。今日我々が当然のことと見なしている、<sup>リスペクタビリティ</sup>市民的価値観、すなわち近代社会の出現から現在に至るまでヨーロッパにおいて規範とされている作法、道徳、性的態度の歴史において、<sup>ナショナリズム</sup>国民主義は決定的な役割を果たした。我々が変化しないと見なしている理想は、およそ200年前には目新しいものであった。ちょうど18世紀に近代の<sup>ナショナリズム</sup>国民主義が出現したとき、<sup>リスペクタビリティ</sup>市民的価値観の理想とそのセクシュアリティの定義も同時に登場したのである。——略——<sup>ナショナリズム</sup>国民主義と<sup>リスペクタビリティ</sup>市民的価値観の関係を分析することは、我々の社会に浸透した最も重要な諸規範の展開を跡づけることを意味する。つまり、本書の記述の大半を占める男らしさの理想と、それが女性の立場へ及ぼす影響、そしてこの規範の<sup>インサイダー</sup>適応者、それとの比較において、異常または病気であると見なされた<sup>リスペクタビリティ</sup>アウトサイダーなどが問題となる。セクシュアリティの歴史を、<sup>リスペクタビリティ</sup>市民的価値観の関心や<sup>ナショナリズム</sup>国民主義の先入観という文脈で分析することは、我々が今どこにいるのか、いかにしてここにきたのか、そしていかに変わりうるのかを認識する一助となろう<sup>10</sup>。

南アというナショナリズムが形成されていく過程とアパルトヘイトの創出とは相関関係で捉えられ、その文脈において上記で定義されている「市民的価値観」の『『礼にかなった正しい』作法と道徳』はそのままアパルトヘイトという南アにおける人間関係における作法と道徳とに読み替えることができるのではないだろうか。そして、この作法と道徳が特定の権力を持った人間が思い描く「あるべき」南ア像へ人々を組み込んでいく役割の一端を担ったのではないだろうか。

## 〈アパルトヘイト（法・制度）のなかのセクシュアリティ〉

では具体的に南アにおいてアパルトヘイトとセクシュアリティの関係はどのように表出てきたのだろうか。以下ではセクシュアリティに関わる二つの法律「背徳法 (the Immorality Act)」と「交婚禁止法 (the Prohibition of Mixed Marriage Act)」<sup>11</sup>を見ていく。

### ：背徳法

1948年以前の状況<sup>12</sup>

南アの諸アパルトヘイト制度は50、60年代に整備されていったが、以下に述べるように

<sup>10</sup> 同上書、9－10ページ。

<sup>11</sup> 「Mixed marriage」の定訳としては「雑婚」もあるが、本稿では交婚を使用する。

<sup>12</sup> ロジャー・オモンド (1989)『アパルトヘイトの制度と実態 一問一答』岩波書店、27ページ。



異集団間の性的関係を規定する法律、慣習は国民党が初めて単独政権を執る1948年以前からも存在していた。ここではまず、制度が整備される以前の性をめぐる状況について簡単に触れておきたい。

1685年に制定された最初の背徳法は白人と黒人<sup>13</sup>との間の婚姻を禁じていたが、白人と混血との婚姻は認めていた。1902年の法律では黒人男性と白人女性の性交を禁じていたが、白人男性と黒人女性の性交は特に禁止しておらず、同じ性交対象である女性に対して人種による対応の違いが明確に出ている<sup>14</sup>。

#### 1927年「背徳法」

さらに1927年J.B.ヘルツォーク（Hertzog, J.B.M.）を首相（1924～39年在任）とする国民党、労働党の連立政権時代に「背徳法（Immorality Act）」が制定された。その内容とは男女問わず全ての「ヨーロッパ系」つまり、白人とアフリカ系の婚外交渉を禁止し、罰するものだった。

#### 1950年「改正背徳法」

1950年には「改正背徳法」が制定されたが、改正された内容は片方が白人で他方がアフリカ人、カラード、インド人である場合、両者間の「違法な性交」、「背徳又は猥褻な行為」を禁じるものだった。つまり、27年の法律に比べて適用対象者をカラード、インド人にまで拡大していることに特徴があった。

#### 1957年「改正背徳法」<sup>15</sup>

1957年に改正された「改正背徳法（1957年法律第23号）」では南アフリカ国民でない場合、両者とも外国人である場合に限り同法は適用外だった。またより厳罰化され、最高刑は7年まで引き上げられただけでなく、白人や黒人が「背徳又は猥褻な行為」を「教唆」する場合も犯罪になると定められ、その意味でより権力の介入を容易にする内容になっているといえよう。

#### 1968年「改正背徳法」<sup>16</sup>

フェルヴールト政権下で司法相を担当していたペルサー（PC Perser）は、1967年3月に

<sup>13</sup> 「黒人」、「アフリカ人」という言葉は時代によって名づけられた言い方である。例えば「黒人」という言い方は、現状を打破できない反アパルトヘイト運動において、自分達に協力的な少数の白人の手を借りてではなく、自らの尊厳を自らの手で回復するという目標をもった「ブラック・コンシャスネス運動」が興隆した70年代には積極的な意味をもって当事者達に使われた。

<sup>14</sup> 言うまでもないが、ここでは女性は自分の性交相手を選ぶという主体的な存在としては見なされておらず、男性側の「所有物」的な扱われ方である。

<sup>15</sup> オモンド、前掲書、23,27ページ。

<sup>16</sup> Gevisser, *ibid.*, p.31.

反同性愛者的内容を含む法案を下院に提出した。この発議は延期され、68年に再度、背徳法の改正案として提案された。その内容とは男性、女性いずれであっても同性愛者であれば最高3年までの投獄（compulsory imprisonment）に処することを可能にするものだった。この法案でレズビアンまでも法の網の目にかけられたばかりか、それ以前は男性の同性愛者の公的場での行為を法的に規制するというものだったのが、同性愛を法的に違法なものとする効果をもつことになった。

なお、この68年には「多人種政党禁止法（Act No.51 of 1968, the Prohibition of Political Interference）」が制定され、そのため自由党（連合党のなかの活動的なリベラル派から出発。黒人にも門戸を開放）が解党するなど「あるべき人（集団）」の形がますます規定されていく感があった。

### ：交婚禁止法

1949年「交婚禁止法（1949年法律第55号）」

「交婚禁止法（1949年法律第55号）」は、国民党が1948年の総選挙で単独政権を初めて獲得した後、最初に提出された法案のひとつであった<sup>17</sup>。その内容は白人と他人種との婚姻を違法とするものであり、主としてカラード<sup>18</sup>との婚姻を阻止しようとするものだった<sup>19</sup>。

しかし、この適用は新たな困難を伴った。カラードの場合は混血を重ねていたため、肌の色を持って他の集団から区別する定義ができなかったのである。1927年の「飲酒法」における定義ではカラードは、「ヨーロッパ系、アジア系、原住民のいずれでもなかった。カラードとして受け入れられている者との習慣的なつき合いが、人種登録法に照らして識別する特徴としてやがて使われることになった」<sup>20</sup>という曖昧なものだったのである。

もともとカラードとの結婚はケープ州、ナタール州では式を挙げて祝うことが可能だったが、トランスヴァール州ではなかった<sup>21</sup>。また、国民党が成立する直前の1943年から46年までの交婚の件数は、それぞれ92件、99件、77件であり、数値的には大きな問題ではなかった<sup>22</sup>。それが規制の対象となっていた背景には何があるのだろうか。その点を法案成立までの過程で考えてみる。

<sup>17</sup> オモンド、前掲書、23ページ。

<sup>18</sup> カラードの「白人」コミュニティでの受けとめられ方は国民党政権成立以降に大きく変化していく。それ以前は、カラードに同じ「ヨーロッパ系」の血が流れているとして親近感を持つものは珍しくなかった。

<sup>19</sup> この法律により1950年から25年間で10万人を越す男女が裁判にかけられたという。朝日新聞、1984年7月16日、篠田 豊（1985）『苦悶するアフリカ』42ページ。

<sup>20</sup> E.H.ブルーケス（1974）『アパルトヘイト—文書・記録による現代南アフリカの研究』、未来社、306ページ。

<sup>21</sup> 人口比的にケープ州にはケープマレーとよばれるカラードが多く、ナタール州にはインド系が多く存在していたが、トランスヴァール州はアフリカーナーのホームグラウンドともいえ、カラードの存在そのものが少数であったことにも関係していよう。

<sup>22</sup> ブルーケス、前掲書、306ページ。

議会において法案成立を目指す側のナショナリスト党は、「カラードがますます浸透してきたのを防ぐために障壁を強化することを考慮するほど、生物学的意味における人種的純血には関心をもってはいなかった」<sup>23</sup>

では、法案の真の狙いはどこにあったのだろうか。この法案が白人以外の集団間の結婚を禁じるものではなかったことや、ナショナリスト党のJ.H.スタイン博士の「法案は実際的で必要でもないと感じていたが、その価値を南アフリカ式生活の『文章による証明』であるとみていた。——略——それは白人種の特別の地位を主張するものであった」<sup>24</sup>という内容の発言からもあくまで、法案は白人（ヨーロッパ系）の保護が目的であった。そしてこのような主張の仕方には上述したモッセの「市民的価値観」に相当する南アにおける価値基準の創出とその「押し付け」が感じられないだろうか。

1968年「改正交婚禁止法」(1968年法律第21号)

南ア人の男性または南アに居住する男性が、国外で結婚する場合、その相手が別人種るとき、南ア国内で合法的に婚姻関係を継続することはできず、そのためその婚姻を無効で何の効果も生じないと定めていた<sup>25</sup>。

1985年廃止に至るまで。そして取り残されたもの

上述してきた背徳法や交婚禁止法などで規制されてきた異性間交渉の禁止は、アパルトヘイトの「改革」期と言われた1985年、6月14日をもって「交婚法及び背徳法第16条<sup>26</sup>を廃止する法律（1985年法律第72号）」によって廃止されたが<sup>27</sup>、法律名から分かるように背徳法に関しては16条の廃止であって、同性愛や売春を禁じた他の条項は、従来通り効力を持ったままだった<sup>28</sup>。なお、法的に同性愛を禁じられたのは男性間に対してであり、女性間つまり、レズビアン間の性交渉は法的には処罰対象にはならなかった。

<sup>23</sup> ブルーケス、310ページ。

<sup>24</sup> 同上書。

<sup>25</sup> ロジャー、前掲書、27ページ。

<sup>26</sup> 同条が、異人種間の性交を禁じる条項であり、「違法な性交」または「背徳もしくは猥褻な行為」を対象としていた。違反者に対して最高7年の重労働による刑罰、男性が50歳以下の場合は最高10回以下の鞭打ちの両方が科されることが規定されていた。ロジャー、25ページ。

<sup>27</sup> ボタ（P.W.Botha）首相は、国際的にも批判の高かったこれらの法律について南アの国際的孤立を深めることを避けるために、1980年、ケープタウンでの国民党大会で次のような演説を行った。「モーゼの異人種との結婚を非難したミリアム（\*ミリアムは非難の言葉を口にしたため、ライ病となった）とアロンに何が起きたか、聖書をよく読んでほしい」、「わが国では（異人種が）愛し合い結婚を考える場合、障害が存在している」などと述べ、これらの発言は1984年7月発表の議会特別委員会による「交婚禁止法、背徳法は早急に廃止すべき」という調査報告に繋がったという。篠田、前掲書、42ページ。

<sup>28</sup> オモンド前掲書、項目「異人種間の性」(23～28ページ)の注1.2（258ページ）。



## 〈アパルトヘイト（規範・生活状態としての）のなかでのセクシュアリティ〉

### ：南アにおける同性愛者の位置づけ — 南アの都市化、アパルトヘイト整備の歴史との連動

セクシュアリティの中でも異性間での交渉は85年に部分的ではあっても法律が廃止されるなど緩和されたが、同性間における厳罰化が継続されたことは、どのような意味をもつのであろうか。異人種、異性愛者間の抑圧例も規範、生活状態としてのアパルトヘイトであるが、同性愛者に対しては同性愛そのものに対する偏見が、異性愛者に対するものとは異なる視線をアパルトヘイトに加えたのではないだろうか。それは異性愛者に対する以上の抑圧的な規範であったと同時に、分断、分裂方向に人々を働かせるアパルトヘイトの想定を上回る事態を生み出すものにもなっていたかもしれない。以下では彼、彼女たちへの社会的認知、位置づけや、それに対する反応としての彼・彼女たち自身の動きについて簡単にふれてみたい。

アパルトヘイトが制度として構築、整備されていくのは国民党が初めて単独政権を執った1948年以降であり、特に「アパルトヘイトの設計者」と言われるフェルウールト首相<sup>29</sup>在任中（1958～66年）において推進されたと言われる<sup>30</sup>。

<sup>29</sup> 「1901年にオランダに生まれ、ボーアびいきのオランダ人の両親とともに、1903年に南アフリカに移住した。ケープタウン、南ローデシア、オレンジ自由州で育った彼は、情熱的に、アフリカーナーとアイデンティティを重ね合わせるようになった。私生活においては、彼は魅力的な人物だった。公務においては、彼は独善的で、不寛容で、暴力的で、外国人嫌いの人物であった。フェルウールトは、アフリカーナーの最高学府ステレンボッシュ大学で心理学博士号を取得し、1927年にドイツの諸大学を訪問したあと、ステレンボッシュ大学の応用心理学の教授になった。1930年代の半ば、彼は「ブアホワイト」のための運動に参加するとともに、ナチス・ドイツからのユダヤ人移民に反対した。1937年、彼は、トランスバールのアフリカーナーを国民党のもとに結集させるという明確な目的をもって国民党の基金で創設された、『ディー・トランスファール』の設立編集者になった。1948年までに、フェルウールトは、熱烈な共和主義者として広く知られるようになった。それからマラン（首相在1948～54）は、彼を上院議員に任命し、1950年には原住民問題担当大臣に任命した。フェルウールトが南アフリカの首相を務めたのは1958年から1966年9月6日までだった。この最期の日、議会で重要な演説を行おうとしていたフェルウールトは、錯乱した出席者によって刺殺された」 レナード・トンブソン（1998）『新版 南アフリカの歴史』明石書店、332ページ。

<sup>30</sup> ただし、主要なアパルトヘイト法体系が整備されたのはマラン首相時代と言われる。なお、国民党政権が最初に制定した懲罰的法律のひとつに「共産主義弾圧法」（1950年）がある。その内容は共産主義を大雑把に定義した上で、共産主義に関わる目的を助長しかねないと見なされる人物を即時に処分できる権限を法務大臣に与えるものだった。これに代表される抑圧的法律の立法化は1950年代半ば以降加速していった。その他の法律として「騒擾集合法」（1956年）、「非合法団体法」（1960年）、「破壊活動法」（1962年）、「一般法修正法」（1966年）、「テロリズム法」（1967年）、「国内治安法」（1976年）がある。これらの法律により警察は強大な権力を与えられることになった。具体的には裁判を受けさせずに逮捕が可能となったり、逮捕者の身元を公表せずに、官憲以外には誰にも会わずに独居房で無期限拘禁も可能だった。組織に対してもいかなる組織でも禁止処分が可能となり、集会の開催禁止、国外からの資金援助を止めさせることなどもできた。さらに「パンツァー法修正法」（1964年）では、政府はいつでも、どの町、白人農場からでもアフリカ人を追放できる権限が付与されたり、「公共治安法」（1953年）では、政府が公共の治安、社会秩序の維持が深刻な脅威に晒されていると判断し、これを回復するには通常法律では不十分と見なした場合、政府が国土の任意もしくは全土に非常事態宣言を発し、布告によって統治を行う権限を与えられる条項が含まれている。これら一連の法律の大半が官憲が自分たちに委託された法的権限をどのように行使したかを裁判所が調査することを禁じていた。トンブソン同上書、347～348ページ。

このような背景のもと1950年代半ばまでには南アにおいて同性愛者 (homosexuals) のイメージは、2つの偏見、つまり、「幼児への性的虐待者 (child-molesters)」と「ドラッグ・クィーン (drag queen)」の間を揺れ動いていたという<sup>31</sup>。こうした偏見はありつつもヨハネスブルグ、ケープタウン、ダーバンといった都市部で比較的存在を侵害されない形で、同性愛者達は存在していた。そして彼らの歴史は、以下に述べるように南アの都市化との歴史と連動している。

金鉱開発によりヨハネスブルグという街が誕生し、1920,30年代に人々は農村部から都市へと流入し始めた。それは故郷から物理的に移動することで精神的な自立 (autonomy) に芽生え、同性愛者としてカミングアウトすることが可能になった瞬間でもあった。ケープ・マレーのコミュニティを基盤とするカラードの同性愛者、「モッフィ (Moffie)」たちの長き歴史があるケープタウンを除いては、同性愛者のサブカルチャーは白人男性の概して中産階級 (white, male, middle-class) のものであった。しかし、先に述べたような経済の変化に伴う人の移動の変化、つまり、白人の都市への流入と黒人の単身労働者の流入とが並行して起きたことによって新たな出会いのきっかけにもなっていた。それは、家族から離れて単身、鉱山の宿舎 (コンパウンド) で生活するなかで状況的にそれまでの性生活の補完として同性愛者へと育まれる状況が創出されると同時に、文字通り、同性愛者として目覚めたものたちもいた。そうしたもの達にとって徐々に「隔離 (アパルトヘイト)」の進む南ア社会においては自由に移動できる白人と黒人労働者達が出会える場は数少なく、そうした貴重な場が南アのるつぼ (melting pot) ともいうべき、ヨハネスブルグのフィータス (Fietas)、ソファイアタウン (Sophiatown)、ケープタウンのディストリクト・シックス (District Six) といった場であった<sup>32</sup>。はからずもアパルトヘイトを推進する社会の動きが彼らのアイデンティティを表出させる契機にもなっていたのである。

この頃までは政府の標的として激しい弾圧にあってはいなかったが、そもそも同性愛者に対してはオランダの植民地支配の頃から慣習法のかたちで既に男性間の交渉を禁じるという状況は存在していた。しかし、南ア社会全体からみても50,60年代というアパルトヘイトに

<sup>31</sup> Gevisser, op.cit., p.18

<sup>32</sup> 1950年の「集団地域法 (the Areas Act)」とその修正法によって政府は都市において地域を分割し、特定の人種に属する人々だけが居住、労働できる区画を設置した。そのため多くの場合、かつては黒人が占有していた地域が白人のみが占有できるように区画整理され、この法律の名のもとに多くの強制移住が行われた。そのなかの悪名高い移住のひとつに「ソファイアタウン」の強制移住がある。ヨハネスブルグの中心から約6キロ西に位置するソファイアタウンは、「都市地域法」(1923年)によりアフリカ人の土地購入が禁止される以前からアフリカ人が土地を所有していた貴重な居住区だった。しかし、政府は1955年、この町の住民をヨハネスブルグから約20キロ離れたメドウランズに移住させ、町は白人のための町として再区画されて名前も「トリオンフ (勝利)」と変えられた。ディストリクト・シックスも悪名高い強制移住のひとつであるが、もともと19世紀初めからカラードの居住地となっていたこの地の住居を破壊し、住民をより環境の劣るケープ・フラッツへと移住させた。トンブソン、前掲書、340ページ。

よる弾圧が増していく時期に、同性愛者たちへも標的としての目が向けられていった。

1966年1月、ヨハネスブルグ北部に位置する、英語系白人が住む閑静な郊外の町であるフォレストタウンで、有名な「フォレストタウンの襲撃 (Forest Town raid)」が起きた。地元でよく知られた社交家が主催する集まりに警察の手入れが入り、9人の男性が女装 (masquerading as women) を理由に、ひとりが未成年者へのみだらな行為があったとして逮捕された。これ以前の1950年代にも平和を乱すとして公的な場における周期的な警察の手入れはあったものの<sup>33</sup>フォレストタウンの手入れは警察がそれまでに行った手入れのなかで最大かつ最も組織的、世間にも知られたものとなった。そして、この手入れがなぜ起きたのか未だ解明されていない。というのも1960年代半ばにおいて、そもそもゲイの暮らしぶりというのは大して世間に知られて無い上、この手入れの前に警察のゲイ文化に対する関心が目に見えて増しているということもなかったためである。これに対するもっともらしい説明としてはフェルヴールト首相率いる南ア当局は、「白人による文明化 (white civilisation)」に対する脅威と見えるものは何でも追放しながら、南ア中にアフリカーナーのキリスト教的国家支配を強化していたからだとする説明はある<sup>34</sup>。

エピソード2で語られた同性愛者への認知はこうした60年代のものだが、当時、ヨハネスブルグで活動していたゲイの男性たちが当時を回顧するなかでアフリカーナーの文化、宗教団体がより裕福なユダヤ人やイギリス人の男性がアフリカーナーの若者を貶めていると扇動しており、その背景にはほとんどの下働き (rent-boys) がアフリカーナーの若者であり、雇い主の大半が裕福な英語系白人だったからと、発言している<sup>35</sup>。扇動していたとされるアフリカーナーたちの真意は不明だが、当事者のゲイ自身がそのような認識をもつ状況があったということは留意すべきだろう。さらに、前章で述べたように1968年には改正背徳法によりますます同性愛者への政府の取り締まりは厳しくなった。

しかし、アフリカーナーのユダヤ人、イギリス人への敵視からも想像できるように、この当時の政府当局が思い描く同性愛者は主として「白人男性」であって、黒人男性をその定義には含めていなかった<sup>36</sup>。このことは、アパルトヘイトが隔離の前提とする要素として人種のみならず、はからずも白人内での経済格差を背景とするエスニックな亀裂もその範疇としていたことを示唆し、さらにこうしたアパルトヘイトの要素がセクシュアリティに影響を与えたり、逆に受けていくなかで「あるべき南ア人像」を形成し、守るために異分子を排除するというアパルトヘイトの機能が形成されていった例と言えるのではないだろうか。

<sup>33</sup> もっとも悪名高いものとして1956年ダーバンのエスプラナードでの手入れがある。

<sup>34</sup> Gevisser, *ibid.*, pp.30-31.

<sup>35</sup> Gevisser, *ibid.*, p.31.

<sup>36</sup> Gevisser, *ibid.*, p.34.

### ：サブカルチャーから表舞台へ：70年代から80年代後半の変化

こうして徐々に同性愛者特に、ゲイの人々は弾圧の対象となっていくが、南アにおいてサブカルチャーとしてのゲイ文化は70年代から80年代にかけて根付いていった。しかし、集団としてのアイデンティティを表明し、運動の形になっていくのは、82年に南アで初の全国的な同性愛者の団体である「南アフリカゲイ協会（Gay Association of South Africa, GASA）」が、ヨハネスブルクに設立されてからである。そもそも、社会運動としての観点からいくと、1980年代後半になるまでは、集団として目立つような同性愛者の権利闘争はなく、散発的なものがあつたのみだった。しかも活動範囲や社会的インパクトの面から見ると、人種ごとに活動が分かれた制限的なもの<sup>37</sup>だった<sup>38</sup>。さらに反アパルトヘイト運動との繋がりという点では、ほとんど接点をもたなかった。彼らの運動に対してのフォーカスが限定的であったことだけでなく、白人の中、上流階級の男性によって構成される集団であったということもあったと指摘されている<sup>39</sup>。

GASA自体は、当初、「白人」「中産階級」のゲイのための社交場として活動しており、政治的なことから距離を保ちながらゲイのニーズに応じていくという姿勢だった。この姿勢は、1986年、数少ない黒人メンバーの一人であるシモン・ヌコリ（Simon Ncoli）が、反アパルトヘイト闘争に関わったという罪で投獄されたときに、彼を支援しないという決議にも現れていた。この決議は、反アパルトヘイト運動に関わっていたゲイ、レズビアンから反発を受けたばかりか、1986、7年の「国際ゲイ・レズビアン連合（International Lesbian and Gay Alliance, ILGA）」年次会合で議題としてとりあげられるなど海外のゲイからも注目をあびることとなった。1986年には、ILGA内では、GASAを加盟から追放すべきだとの意見も出たほどだった。GASAの事務局長であったケヴァン・ボタ（Kevan Botha）は、こうした批判に対してGASAが、非政治的なスタンスをとるゲイ支援組織であることを説明し、アパルトヘイトにも反対していること、様々な人種のゲイが加盟していることを主張した。そして、むしろ、ILGA側の態度こそ人種差別的であると批判するなど、当時の南アにおけるゲイ、同性愛者の置かれた立場が垣間見れる出来事であった。

### ：憲法制定課程での働きかけ

このようにアパルトヘイト社会に組み込まれながらも同性愛に対する偏見とも相まって運動を進めるにしても微妙な立場にあった彼・彼女たちであったが、1990年、マンデラが釈放され、ANCを含む諸政治組織が合法化されたその年は、南アのゲイ運動にとっても、転

<sup>37</sup> 反アパルトヘイト運動自体も83年の「統一民主戦線（UDF）」結成によって、ようやく従来の地域ごと、エスニック集団ごとの個々の活動ではなく、全国規模の運動展開を見せ始めたことを考えると、同性愛者たちの運動も特殊な状況ではないと言える。

<sup>38</sup> Croucher, op.cit., p.317.

<sup>39</sup> ibid.



換点であった<sup>40</sup>。というのもそれ以前からのUDFとの接点により、ゲイの活動家達は、ゲイ・レズビアンをANCに認識させるのに好位置につけたのである<sup>41</sup>。

ただし、ANC内の見解は、一様ではなかった。全国執行委員会のメンバーであったルース・モンパティ（Ruth Mompati）のように、ホモセクシャルは、アブノーマルであり、ゲイは、権利を必要としない裕福な特権階級の集団だと主張するものもいた<sup>42</sup>。

こうした意見とは逆に、好意的な集団というのは、ヨーロッパやアメリカでの亡命生活を経て帰国したメンバーだった。彼らは、ゲイの解放という争点に対して意識的であった。この点についてクロッカーは、ANC内で影響力をもつエリート層による後押しが、あったとみている<sup>43</sup>。具体的には、「もし、アパルトヘイトに勝利した後、道義的な価値のある闘い（crusade）を見出すとすれば、それは、ホモフォビアとヘテロセクシズムだ」と述べた、ノーベル平和賞も受賞した英国国教会のデズモンド・ツツ主教もその一人である。また、以前、ANCの憲法制定に関しての法的な顧問を務め、憲法裁判所判事を務めたアルビー・サッチス（Albie Sachs）の名も挙げている。サッチスは、「ゲイやレズビアンに起きてきたことは、アパルトヘイトの本質である。民主主義の本質は、人々が自由にありのままの自分であることである」と発言している。そして、以前は、ゲイの権利闘争の活動家であり、高等裁判所判事のエドウィン・キャメロン（Edwin Cameron）も後押しした一人として挙げられている。キャメロンは、また、クロッカーとのインタビューのなかで、暫定憲法の草稿過程で専門委員会のメンバーとの個人的な接触ややりとり（intervention）が、影響をもったことを認めている<sup>44</sup>。

結果、公的には92年の政策会議でANCはゲイの権利を認知し、権利章典に盛り込むことに同意した。これがエピソード1でみた憲法条項への挿入に繋がったのである。

その後の同性愛者をめぐる動きとしては、1998年に憲法裁判所がようやく男性間の性交渉を犯罪とすることを禁じ、関係諸法から削除したり、1999年9月の国際ゲイ・レズビアン連合会議（International Gay and Lesbian Alliance Conference）では、南アがアフリカ大陸初の開催国となるなど<sup>45</sup>、個々の生活レベルでの環境の変化の有無は別として、未だ軋轢はある中、南アの同性愛者たちにも彼・彼女らを取り巻く環境に動きが見られている。

---

<sup>40</sup> Croucher, *ibid.*, p.316.

<sup>41</sup> Croucher, *ibid.*, p.319.

<sup>42</sup> *ibid.*

<sup>43</sup> Croucher, *ibid.*, p.323.

<sup>44</sup> Croucher, *ibid.*, p.323.

<sup>45</sup> Croucher, *ibid.*, p.316.



## 〈おわりに〉

以上、アパルトヘイトの性的側面と思われる事象を法律と同性愛者の立場を中心にマッピングしてきた。今後のリサーチによって様々な側面が浮かび上がってくると推察されるが、今回のマッピングだけでもアパルトヘイトとセクシュアリティとは個別のものではなく、関係しあいながら南ア社会を形成してきたことが分かる。そこには法律を中心とするアパルトヘイトという制度においても、人々の規範、心理面という生活状態においても、アパルトヘイトと密接な関係を持つセクシュアリティの問題は人々の日々の暮らしに浸透しており、アパルトヘイトの価値観とその社会への浸透、さらにその浸透した価値観によって支えられる制度と社会という循環に大きな役割を果たしていることが見てとれるのではないだろうか。さらに、「セクシュアリティ」という範疇は人種、階級、さらにはジェンダーを横断する要素であるが故に、従来のアパルトヘイトの説明による対個人、集団に対しての分断、分裂とは違う力学としてアパルトヘイト及び反アパルトヘイト運動に作用していたのではないかということも考えられる。別の言い方をすればセクシュアリティとの関係を考えることでアパルトヘイトの「破れ目、綻び」が見え、アパルトヘイトの理解をさらに深めてくれる可能性があるだろう。

(かみくぼ かずよ 本学非常勤講師)